世界の視点をめぐる思想史的研究

研究代表者　**栗　原　　隆**

1．分担者

城　戸　　淳
佐　藤　徹　郎

2．協力者・所属

平　川　　愛

3．2007年度の研究活動の概要

毎週，定期的に，平川愛と栗原隆は，８月までは，G・E・シュルツェの「エーネジデムス」を，11月からはS・マイモン「エーネジデムス宛フィラレーテスの書簡」を講読しながら，訳文を作成した。

2007年９月１日㈯は CLLIC で，２日㈰には「クロスパルにいがた」にて，公開研究会を実施，栗原は９月１日に，「表象もしくは象が支える世界と哲学体系 ― 知的世界を構築する神話としての〈基礎付け〉と自己知の体系 ―」を発表した。

4．2007年度の研究成果の概要

本年度の研究は，『世界の視点　知のトポス』へと収斂することになった。すなわち，カントの超越論的観念論が誤解される発端となった，カルヴェとフェーダーによる「ゲッティンゲン書評」，意識に内在しながら，意識の外に原理を求めようとしたラインホルトの表象一元論を克服して，フィヒテに超越論的哲学の成立を促すことになったシュルツェの「エーネジデムス」，その「エーネジデムス」に反論するマイモンの「エーネジデムス宛のフィラレーテスの書簡」，やはりフィヒテにおける超越論的哲学の成立のきっかけとなった，マイモ

ンの「超越論的哲学についての試論」，さらに，シェリングにおける超越論的観念論の原型のモチーフが散見される「最近の哲学的文献の一般的概観」など，まさしく「知のトポス」の誌名に相応しく，知の成立を明らかにしようとする「超越論的観念論」が生まれる思潮を明らかにすることが出来た。すべて本邦初訳であることや，そもそもの原著が手に入り難いものであること，さらには難解であることから我が国では研究されてこなかった文献を翻刻，紹介したものであり，日本哲学会でもこのプロジェクトを注視している。本年度の研究は，従来のドイツ観念論研究にあって，日本はもとよりドイツでも必ずしも光が当てられてきたとは言えない伏流の思想を詳らかに紹介したことにより，教科書的な哲学史に書き換えを迫るほどの，極めて貴重な成果を挙げ得たと信じる。

5．2007年度の研究成果の一覧

学会発表

栗原隆「精神と世界 ― 歴史的世界を創建する神話としての超越論的観念論 ―」（日本ヘーゲル学会シンポジウム発表、於、名古屋市立大学、2007年６月17日）

著書

共編著：栗原隆（編）『芸術の始まる時，尽きる時』（東北大学出版会，2007年３月，全458頁）

このうち

単独執筆：栗原隆「遊戯と精神」（239～242頁）

単独執筆：栗原隆「芸術が〈興味をそそるもの〉になった時 ― ヘーゲルの芸術終焉論に見る〈自然からの疎隔〉と〈哲学における宥和〉 ―」（295～328頁）

単独執筆：城戸淳「カントの崇高論 ― 芸術終焉論の手前で／の後に ―」（373～399頁）

共　著：加藤尚武（編）『哲学の歴史 7 理性の劇場』（中央公論新社，2007年７月，全718頁）

このうち

単独執筆：栗原隆「ヤコービ／ヘルダー」（220～257頁）

『世界の視点　知のトポス』Nr. 3

このうち，

単独訳：城戸淳「ゲッティンゲン書評」（１～14頁）

共　訳：栗原隆・平川愛：G・E・シュルツェ「エーネジデムス」(部分訳)（15～53頁）

共　訳：平川愛・栗原隆：ザロモン・マイモン「エーネジデムス宛のフィラレーテスの書簡」（55～93頁）

単独訳：平川愛：ザロモン・マイモン「超越論的哲学についての試論」（95～196頁）

単独訳：栗原隆：F・W・J・シェリング「最近の哲学的文献の一般的概観」（197～240頁）

共編著：栗原隆（編）『形と空間のなかの私』（東北大学出版会，2008年４月刊行，全335頁）

このうち，

単独執筆：佐藤徹郎「無限の空間」（１～20頁）

単独執筆：城戸淳「カントの空間論 ― 身体・開闢・感情 ―」（55～78頁）

単独執筆：栗原隆「生きられる空間，もしくは世間という体」(101～120頁)